

Title	情報要求に応える情報提供部分に現れる「よ」が付加される発話の種類とその出現位置
Author(s)	大上, 協子
Citation	日本語・日本文化研究. 23 P.38-P.47
Issue Date	2013-12-20
Text Version	publisher
URL	http://hdl.handle.net/11094/26921
DOI	
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

情報要求に応える情報提供部分に現れる 「よ」が付加される発話の種類とその出現位置

大上 協子

1. はじめに

日本語学習者にとって終助詞「よ」を適切に用いることが難しい要因の一つは、談話における終助詞の役割が十分に解明されておらず、談話の観点からの会話教育が行われていないということがある。そこで、談話における「よ」の役割を明らかにするため、話者の役割が話を聞き出す側と話を聞き出される側に明確に分かれているインタビュー記事を資料とし「よ」を観察した。その結果、先行研究（陳(1987)、蓮沼(1996)等）で指摘されているとおり、「よ」は話者間の情報・認識に何らかのギャップがある場面で多く使用されていた。しかし、ギャップを埋めるための情報提供部分は、先行研究で分析対象とされているような一発話のものは少なく、多くは複数の発話から構成されており、「よ」はその中の一発話のみに付加されていた。よって、このことから、会話では認識や情報のギャップを埋める際、複数の発話からなる情報提供部分のどの一発話に「よ」を付加するのが重要だということが推測できる。そこで、本稿では、情報要求に応える複数の発話からなる情報提供部分に現れた「よ」を観察し、どのような発話に「よ」が付加されているか、なぜ一発話だけに「よ」が付加されているかについて論じる。

2. 研究目的

「情報を引き出す側」であるインタビュアーと「情報を提供する側」であるインタビューイに話者の役割が明確に分かれているインタビュー形式の談話を資料とし、インタビュアーからの情報要求に応えるインタビューイの情報提供部分が複数の発話で構成されている場合、「よ」がどのような発話に付加されているのか、その出現位置はどこかを分析・考察することによって、談話において「よ」が果たす役割の一端を明らかにすることが本研究の目的である。なお、文末形式と「よ」の関係については考察の対象としない。

3. 先行研究

終助詞「よ」の機能について考察した先行研究は多いが、「よ」の機能をどのように規定しているかにより、次の2つに大別できる。

①陳(1987)・益岡(1991)・メイナード(1993)・蓮沼(1996)・伊豆原(2003)等

「よ」の機能は、話し手と聞き手の間に、情報量・認識に何らかのギャップがあることを表し、聞き手に対して認識形成の働きかけをすることである。

②白川(1992)・中西(1993)・大曾(2005)等

「よ」の機能は、発話が聞き手に向けられていることを明示的に表すものである。

上記先行研究の中から①のタイプは蓮沼(1996), ②のタイプは大曾(2005)について概観する。

3-1 蓮沼 (1996)

蓮沼(1996)は、「よ」の基本的な機能を次のように規定している。

「よ」は、文脈に認識上の何らかのギャップの存在を表示するとともに、そうした状況における認識能力の発動,あるいは認識形成に対する指令を表す。 (p.384)

上記のように規定した上で、「よ」が表す様々な表現効果は、「よ」の基本機能,音調,文脈,「よ」が付加される文の表現類型との相乗効果によって生み出されるものであるとし、「よ」の音調と付加される表現類型によって,どのような表現効果が生まれるかについて考察している。

また、「よ」と談話の関係については,論文の最後で次のように述べている。

「よ」の使用によって,文脈状況に対する話し手の認定,およびそれと当該の発話との関連性が明示されることにより,話し手の発言を聞き手がどのように理解すべきかについて方向づけが与えられることになる。その意味で,「よ」は談話理解の促進に一役買っているということもできるわけである。 (p.392)

3-2 大曾 (2005)

大曾(2005)は,雑談コーパスに現れた終助詞「よ」を考察し,白川(1992)¹を参考に,「よ」の機能は「話し手が自らの情報,判断,主張,意志等を聞き手に明示的に伝える」(p.5)ことであると規定している。その上で明示的に伝える必要がある場面は,「聞き手がある情報を持っていない」(p.5),または,「聞き手と自分との判断が異なることに気づき,自分の判断を聞き手に明示的に伝える必要がある」(p.7)と話し手が判断した場合であると述べている。前者については,更に2つ分け,「状況から聞き手はこの情報を必要としていると話し手が判断する場合」と「単に,自らの情報を相手に明示的に伝える場合」(p.5)があると説明している。

3-3 先行研究の課題

以上,先行研究を概観したが,終助詞「よ」は会話の中で使用されるにもかかわらず,会話場面,談話目的,話者の役割・関係ということが考慮されることなく,単なる一文,もしくは会話形式の二文に現れる「よ」しか考察していないものが多い。インタビュー番組を資料とした伊豆原(2003)や雑談コーパスを資料とした大曾(2005)も,「よ」の機能を説明するための会話例に生のデータを使用しているだけであり,会話場面,談話目的,話者の役

割・関係という観点からの「よ」の観察はあまりなく、談話に出現する「よ」が考察されているとは言い難い。

談話に現れる終助詞「よ」を考察したものとしては、文脈機能指定という観点から「ね」と「よ」を考察した大浜(2004)があるが、「会話をこれまで通りの方向で進めるのか、それとも異なる方向をとるかという選択である。前者を『ね』が、後者を『よ』が表示」(p.2)し、「ね」は「整合的」、「よ」は「非整合的」と説明している。しかし、主たる考察対象は「ね」であり、「よ」については、あまり考察されていない。

以上のように談話という観点からの「よ」の研究は、ほとんど進んでいないというのが現状である。本稿のデータにおいて出現した「よ」の多くも、先行研究で既に指摘されている情報や認識にギャップがある場面で使用されている「よ」であったが、「よ」の基本的な機能は白川(1992)等がいう発話が聞き手に向けられていることを明示的に表すものであり、発話が相手に向けられていることを殊更明示しなければならない場面が、話者間に情報や認識のギャップがある場面であると考えられる。

しかしながら、本データをみると、多くの先行研究で分析対象とされているような一文の情報提供に「よ」が付加された例は少なかった。よって、会話で用いられる「よ」の働きについて明らかにするためには、従来のような一文、もしくは会話形式の二文に現れる「よ」を考察するだけでは不十分であり、実際の談話に現れた「よ」を観察し、複数の発話からなる情報提供部分に現れた「よ」を分析・考察しなければならないと考える。

4. 分析対象

本稿では、以下のようなインタビュー記事をデータとする。

- ①「情報を引き出す側」であるインタビュアーと「情報を提供する側」であるインタビュイーに話者の役割が明確に分かれている。
- ②インタビュイーに自分自身について語ってもらうという談話の目的が会話の参加者間で共有されている。

このようなインタビュー記事をデータとした理由は、談話に現れる「よ」の役割を明らかにするためには、先ず、話者の役割並びに談話の目的が明確な談話に現れる「よ」の働きを分析・考察することから始めるべきであると考えからである。データとして使用したインタビュー記事は同一の週刊誌(『AERA』)に連載された12本である。インタビュアー・インタビュイーの内訳は表1のとおりである。

表1 分析対象となるインタビュー記事のインタビュアーとインタビュイーの内訳

番号	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	⑫
インタビュアー	女性 30代	女性 30代	女性 30代	女性 20代	女性 30代	女性 30代	女性 20代	女性 20代	女性 30代	女性 20代	女性 30代	女性 30代
インタビュイー	女性 40代	女性 40代	女性 40代	女性 20代	女性 20代	女性 20代	男性 40代	男性 40代	男性 40代	男性 20代	男性 20代	男性 20代

インタビュー記事から抽出した終助詞「よ」の全出現数は表 2 のとおり、インタビュアーの発話に現れた 6 例、インタビュイーの発話に現れた 75 例の計 81 例である。

表 2 「よ」の出現数

インタビュー番号	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	⑫	計
インタビュアー	0	0	1	0	0	1	0	0	1	1	0	2	6
インタビュイー	4	5	6 ²	4	4	3	7	13	8	11	9	1	75

インタビュイーが使用した「よ」75 例中 64 例が、インタビュアーとインタビュイーの間に情報・認識のギャップがある場面で使用されていた。「よ」が出現したインタビュイーの情報提供部分の内訳は表 3 の通りである。本稿では、複数の発話からなる情報提供部分の 1 発話に付加された「よ」50 例を分析対象とする。

表 3 「よ」が出現したインタビュイーの情報提供部分の内訳 () 内は「よ」の数

情報提供部分が 1 発話	情報提供部分が 2 発話以上 「よ」の付加：1 発話	情報提供部分が 2 発話以上 「よ」の付加：2 発話
12 例 (12)	50 例 (50)	1 例 (2)

なお、インタビュー記事は文字化される段階で編集されているため、生のデータではないが、編集は読者の理解を助けるために行われており、インタビュー記事に現れた「よ」は、インタビュー形式という談話における「よ」の役割を端的に表している面もあると考える。また、「よ」のイントネーションが上昇調であるか下降調であるかによって、機能に相違があることは蓮沼(1996)³でも指摘されており、談話における「よ」の働きを考える際、音調が極めて重要であることは言うまでもないが、本研究では、既に文字化されたデータを分析対象とするため、「よ」の音調は考察の対象から除外する。

本稿で取り上げるインタビュー記事からの用例については、会話文の発話番号はインタビュアーを「R」、一方インタビュイーを「E」と示す。

5. 情報要求に応える情報提供部分の「よ」が付加される発話とその出現位置

インタビュアーからの情報要求に応える複数の発話からなるインタビュイーの情報提供部分に現れた「よ」50 例をみると、付加されている発話には表 4 のような傾向が見られた。

表 4 情報提供部分における「よ」の出現位置と「よ」が付加されている発話

「よ」の 出現位置	「よ」が付加されている発話	出現数

第一発話	①〈Yes-No 質問〉に対する肯定・否定を明示していない応答	4
	②インタビュアーの認識を訂正・修正する発話	9
第二発話以降	③インタビュイー自身の先行発話に対する「理由説明」	8
	④インタビュイーの話の「背景説明」・「具体的説明」	6
	⑤インタビュイーが伝えたい情報	6
最終部の発話	⑥インタビュイー自身の先行発話を総括した「まとめ」	6
小計		39
上記の分類に当てはまらない「よ」		11 ⁴
計		50

①から⑥について順に見ていくこととする。

①第一発話：〈Yes-No 質問〉に対する肯定・否定を明示していない応答+「よ」

会話例(1)を見ると、インタビュアーの〈Yes-No 質問〉81R に対しては、インタビュアー肯定・否定を明示しておらず、どのように曲が生まれるかについて説明し始めている。その情報提供部分の第一発話に付加されている「よ」は、「よ」が付加された発話で始める一連の発話が〈Yes-No 質問〉に応える情報提供であることを示すものであると推察する。

(1)

<インタビュー④>

81R : 曲をつくるときってというのは、一気にパーツと生まれるんですか。	R : 〈Yes-No 質問〉
82E : すごく感激したりとか、感動したりとか、自分の感情が高ぶっているときってというのは、勢いよく出てくるんですよ。泣くのと一緒に、なんかあふれるっていう感じがあるんです。逆に日々いろんなことにアンテナを張って、興味深く見てないと、あのときどうだったか？という感じになっちゃってメロディーとか思い出せなくなる。	E : 肯定・否定の明示なし+「よ」

②第一発話：インタビュアーの認識を訂正・修正する発話+「よ」

会話例(2)では、インタビュアーの「インタビュイーは怒ったりしなさそうである」という認識を否定するインタビュイーの情報提供部分 64E の第一発話「怒らなさそうな人がいちばん怒るんです」に「よ」が付加されている。インタビュイーに関するインタビュアーの認識が間違っていたり、ずれている場合に、インタビュイーはインタビュアーの認識を直ちに訂正・修正する必要がある。したがって、情報提供部分の第一発話に「よ」を付加することにより、当該発話が重要な発話であることをインタビュアーに示すと考える。

(2)

<インタビュー①>

61R : あの……井上さんって、怒ったりしなさそうですね。	R : R の想定
62E : あのね、若いわ、あなた (笑)。	
63R : ?	
64E : 怒らなさそうな人がいちばん怒るんですよ (笑)。 あとで怒るときのためにね、普段は怒らなさそうな顔 をしてるんです。	E : R の想定を訂正+「よ」

③第二発話：インタビュー自身の先行発話に対する「理由説明」+「よ」

会話例 (3) の場合、インタビュアーの質問「将来、監督をしてみたいですか」94R に対して、インタビューは「ああ、それはないです」95E と答え、その後にくる「なぜ監督をすることはないのか」という理由について述べる発話に「よ」を付加している。この場合、「将来、監督をしたいかどうか」ではなく、そう考える理由の方が話題として重要であるため、「理由説明」に「よ」が付加されていると考えられる。

(3)

<インタビュー⑩>

94R : 将来、監督をしてみたいですか。	R : 《情報要求》
95E : ああ、それはないです。 旬くんを見てたいへんそうだし、前から僕、そういう 才能はないと思ってるんですよ。 ゼロから 1 にすることはできない。でも僕は脚本を らえば、そこから何かをつくり出すことはできます。	E : 《情報提供》 「理由説明」+「よ」

④第二発話：インタビューの話の「背景説明」・「具体的説明」+「よ」

会話例 (4) では、インタビューの発話「僕、誘われたら絶対行くんですよ」56E は、「そこでちょっとずつ思っていることを言えるようになった」56E ことについての背景説明となっており、「ちょっとずつ思っていること言えるようになった」の意味をより正確に理解するうえで有用な発話である。このように、「よ」はインタビューの伝えたい内容を理解するうえで役立つ発話に注意をむけさせたい場合にも用いられると考える。

(4)

<インタビュー⑩>

55R : いつごろから意見を言えるようになりましたか。	R : 《情報要求》
56E : 20 歳を超えて、飲み会に参加できるようになってから です。 僕、誘われたら絶対行くんですよ。	E : 《情報提供》 「背景説明」+「よ」

<p><u>そこでちょっとずつ思っていることを言えるようになった。</u>でも、もっと大人になりたいです。40歳の方が当たり前のことを言ったとしてもすごく説得力があるけど、僕が同じことを言っても「当たり前じゃん」と言われちゃうから。説得力をもちたいんです。</p>	
--	--

⑤第二発話：インタビューが伝えたい情報+「よ」

インタビューの発話「焼き肉が大好きなんですよ」98Eは、インタビュアーの質問「喜びを感じる瞬間は？」97Rに対する答ではなく、インタビューが自ら付け加えた情報である

インタビュー形式の談話では、インタビューはインタビュアーからの情報要求に応えるだけでなく、自身が伝えたい情報を提供する場合もある。その際、自分が伝えたい情報の発話に「よ」を付加することにより、インタビュアーの注意を当該発話に向けさせ、伝えたい情報であることを示すと推察する。

(5)

<インタビュー④>

<p>97R：喜びを感じる瞬間は？</p> <p>98E：おいしいものを食べてるときです。 焼き肉が大好きなんですよ。</p>	<p>R：《情報要求》</p> <p>E：《情報提供》 伝えたい情報+「よ」</p>
---	--

⑥最終部の発話：インタビュー自身の先行発話を総括した「まとめ」+「よ」

会話例(6)32Eの場合は、インタビューの直前の先行発話を総括した「だから何でもありません」に「よ」が付加されている。情報提供部分の最終部の発話で、先行発話の内容を総括した「まとめ」は、インタビューの発話内容をインタビュアーが理解するうえで役立つ発話である。その「まとめ」に「よ」を付加することにより、インタビュアーの注意を当該発話に向けさせていると考える。

(6)

<インタビュー②>

<p>31R：同じ選挙区で戦った野田聖子さんとの関係はどうでしたか。</p> <p>32E：私は別に特に相反するものはないですね。私たちは別に岐阜1区時代に戦ったわけでもなくて、それこそ和気あいあいとやってました。だから私たちは別に何ら、少なくとも私は別に何ら敵対するよなことは一切していません。佐藤さんの好きなのところが一つだけあると、</p>	<p>R：《情報要求》</p> <p>E：《情報提供》</p>
---	---------------------------------

<p>他の国会議員によく言われるんです。なんですかと聞いたら、あんな厳しい岐阜の戦いの中で、佐藤さんは相手の批判を一度もしたことがない、って。 だから何もないんですよ。</p>	<p>「まとめ」＋「よ」</p>
--	------------------

6. まとめ

前章でみたように、複数の発話で構成される情報要求に応える情報提供部分の中で「よ」が付加される1発話には、以下のような傾向がある。

第一発話：「〈Yes-No 質問〉に対し肯定・否定の明示しない発話」, 「訂正・修正」

第二発話以降：「理由説明」, 「背景説明・具体的説明」, 「インタビューイーが伝えたい情報」

最終部の発話：「まとめ」

これらの発話は、インタビューーについての認識を、インタビュアーが効率よく、または、正しく形成する上で役立つ発話である。以上のことから、情報要求に応じて情報提供する場合、情報を提供する側は、相手の認識状況、相手に何を認識させたいのか、どう認識させたいのかを計算し、効率よく、正しく相手に認識させるために要となる発話に「よ」を付加すると推察できる。

「よ」の使用が一回に制限される理由としては、蓮沼(1996)がいう『『よ』の使用によって、文脈状況に対する話し手の認定、およびそれと当該の発話との関連性が明示されることにより、話し手の発言を聞き手がどのように理解すべきかについて方向づけが与えられることになる。その意味で、『よ』は談話理解の促進に一役買っているということもできるわけである」(p.392)ということが関係していると考えられる。つまり、仮に、情報提供部分の複数の発話に「よ」が付加されると、インタビュアーはどのように理解すべきかという方向づけを失い、その結果、認識形成が妨げられることとなるため、「よ」の使用が一回に制限されるということである。逆にいえば、情報提供部分の一発話のみに「よ」が付加されることによって、インタビュアーはどのように認識すべきかを知ることができ、認識形成が促進されるということである。なお、本データはインタビューを文字化し、記事にしたものであるため、実際のインタビューでは、複数の発話に「よ」が付けられたものを編集で削除した可能性がある。しかし、仮に編集で削除されているとするならば、そのこと自体が「よ」の多用が避けられるということの意味しており、日本語の会話教育において「よ」の使用数を考える上で、本データは参考になると考える。

また、上級レベルの日本語学習者には、相手の情報提供を理解する際のキーとなる発話に付加された「よ」を提示し、「よ」の多用が待遇上不適切というだけではなく、情報を効率よく、正しく認識させるうえでも阻害要因となることを認識させる必要があると考える。

今後は、本稿で考察した結果を踏まえ、「よ」と談話展開の関係、「よ」が付加された発話内容と文末形式との関係、並びに、音声データのある資料を観察し、それぞれの発話に付加される「よ」とイントネーションの関係についても明らかにしていきたい。

【注】

1. 白川(1992)は、終助詞「よ」の機能について、仮説という前提ではあるが『よ』はそれが付加された文の発話が聞き手に向けられていることを、ことさら表明する(p.47)と説明している。
2. 大上(2001)では、インタビュー③のインタビューーが使用した「よ」の数は5例と記載されているが、6例が正しい出現数である。
3. 蓮沼(1996)は、「上昇調の『よ↑』は、聞き手側に認識の欠落がある(あるいは見込まれる)状況で、聞き手における認識能力の発動、および認識形成を指示する」、「下降調の『よ↓』は、聞き手、話し手あるいは両者に予め認識の欠落や誤認がある状況で、既有知識や常識的な判断力を動員し、損なわれた認識の回復を指示する」(p.386)と「よ」の音調による機能の相違について説明している。
4. 上記の分類にあてはまらない「よ」とは、「理由説明」、「背景説明」、「インタビューーが伝えたい情報」等が第一発話部分に出現しており、その発話に付加された「よ」である。本稿では、「よ」が付加された発話の内容とその出現位置という観点から「よ」を考察している。よって、出現数が少なかった発話の出現位置が異なる「よ」については論じていない。しかしながら、「よ」の発話が付加された出現位置は異なるものの、「よ」の働きは同じであるあと考える。なお、インタビューアの認識を肯定する発話に付加された「よ」も2例あるが、第一発話部分に現れている。

【データ出典一覧】

『AERA』朝日新聞出版

2010.1.25号(pp.63-66) 2010.3.22号(pp.79-82) 2010.3.29号(pp.75-78)

2010.4.5号(pp.83-86) 2010.4.26号(pp.63-66) 2010.5.24号(pp.63-66)

2010.5.31号(pp.71-74) 2010.7.26号(pp.71-74) 2010.11.22号(pp.67-70)

2011.1.31号(pp.54-58) 2011.2.14号(pp.56-58) 2011.3.10号(pp.77-80)

【参考文献】

伊豆原英子(2003)「終助詞『よ』『よね』『ね』再考」『愛知学院大学教養部紀要』51(2)

愛知学院大学一般教育研究会, pp.1-15

大上協子(2011)「インタビュー記事に現れる終助詞『よ』について—『よ』が付加される発話とその出現位置に注目して—」『日本語・日本文化研究』第21号 大阪大学大学院言語文化研究科言語社会専攻海外特別連携コース, pp.123-136

大曾美恵子(2005)「終助詞『よ』『ね』『よね』再考—雑談コーパスに基づく考察—」『言語教育の新展開 牧野成一教授古稀記念論集』『シリーズ言語学と言語教育』第4巻 ひ

つじ書房, pp.3-15

大浜るい子(2004)「終助詞『よ／ね』の機能再考 ―文脈指定機能を中心に―」『広島大学
日本語教育研究』(14)広島大学, pp.1-7

白川博之(1992)「終助詞『よ』の機能」『日本語教育』77号日本語教育学会, pp.36-48

陳常好(1987)「終助詞―話し手と聞き手の認識ギャップをうめるための文節辞」『日本語学』
6-10 明治書院, pp.93-109

中西泰洋(1993)「文末詞の待遇的な機能についての一考察」『神戸大学留学生センター紀要』
1 神戸大学留学生センター, pp.77-93

蓮沼昭子(1996)「終助詞『よ』の談話機能」『言語探求の領域 小泉保博士古稀記念論文集』
大学書林, pp.383-395

益岡隆志(1991)『モダリティの文法』くろしお出版

メイナード・泉子・K (1993)『会話分析』柴谷方良ほか編『日英語対照研究シリーズ(2)』
くろしお出版